梅鶯仏教壮年会報

第109号
2013年
7月21日

7月例会

期日：7月28日（日）
夕刻5時～6時半

プログラム
お勤め
住職法話
放談会（自由に話しましょう）
仏教讃歌斉唱

$$$

題材法話

※前号からのつづき

「極濁悪」とは、けっして人ごとではなく自分自身のことでした。

浄土教では人間自身をつきつめて、「罪悪生死の凡夫」とか「極重悪人」等と呼び、親鸞聖人でさえ、自身を「愚禿」と呼び、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし（仏に成るどのような修行も遂げられない私は、地獄が定まった行き場所です）」と慟哭されています。

そのような私であるからこそ、私達が救われる道は南無阿弥陀仏のみ教えしかなく、そのために七高僧様方が、本願念仏の道を伝え続けて下さったのであります。

すなわち、「拯済したもう」ということなのです。「拯済」とは、救うということですが、「拯」はおぼれるものを助けるという意味で、「済」は渡ることのできないものを渡してやるという意味です。

凡夫の世界から仏様の世界を見れば、「難度海」と呼ばれる到底渡ることの出来ない果てしなく底知れない海が広がっています。

その海を南無阿弥陀仏の大船に乗って、溺れることなく渡しきって頂くのであります。

道俗時衆共同心
唯可信斯高僧説

最後の2句「道俗時衆は共に同心して、唯だ斯の高僧の説を信ずべし」と読みますが、これは「出家した人も在家の人も、またどの時代の人々であっても、共に心を同じくして、ただただこれらの高僧方の教えを信じるだけであります」と意訳しました。

まず「道俗時衆」とは、「どのような人でも、どの時代の人でも」ということで、すなわち「一人として例外なく」という意味になります。

つまり、阿弥陀様の本願は「一切の衆生が救われなければ覚りを得ない」とした誓いであり、お念仏の教えは、すべての人々が救いの対象であるということです。

このように誓って下さる神仏は他にはなく、大変重要なことなのです。

なぜならば、だからこそこの私も救われるということになるからです。が、自ら編み出した教えであるとの自認からです。

それとまったく対照的なのが親鸞聖人なのです。

親鸞聖人は、けっしてわが教えを信ぜよ」とは仰いません。

そして最後に、「共同心唯可信斯高僧説」、「心を同じくして、高僧方の説を信じましょう」との親鸞聖人の呼びかけで締めくくられるのですが、この呼びかけが実に親鸞聖人らしいのです。

○聞法者としての親鸞聖人

親鸞聖人と同じ鎌倉時代の世に出られた方に日蓮聖人がおられます。

日蓮聖人は「法華経の行者」であることを自認し、社会に自らの存在を誇示して華々しく活動し「われ日本の柱とならむ、われ日本の眼目とならむ」といわれたそうです。

自らを開祖、宗祖と名乗る方達は、往々にしてそのような自己顕示をなされます。

しかし親鸞聖人は、自らがいつでも聞法者の立場に立ち、一人の念仏者、煩悩具足の一衆生として、七高僧の教えに導かれて弥陀御本願の救いを悦ぶよりほかにないと領解されていました。

私達は今でこそ、宗祖親鸞聖人と親しみと報恩の念を持って呼びますが、親鸞聖人は「親鸞は弟子一人もたずそうろう」とおっしゃられたように、自らが教える立場にはけっして立たれなかったのであり、同じくご法義を悦ぶ御同朋、御同行として同目線に立ち続けて下さっているのです。

したがって、親鸞聖人が報恩謝徳のためにつくられた正信偈ですが、それは同時にこの私の悦びの偈（うた）そのものでもあるのです。

完

5月例会住職法話より